

岐阜県中津川市千旦林（せんだんばやし）は、美しい里山の風景の中に湿地が点在する独特の景観を有しています。湿地には、ハナノキやシデコブシなどの希少樹木が群生し（写真）、足元には、シラタマホシクサやヘビノボラズといった、やはり、この地域に特有の珍しい植物が生育しています。湿地は湧水に涵養され、貧栄養で、泥炭の堆積がみられないという特徴をもちます。こうした湿地は、かつては東海地方のいたるところに分布していました。しかし近年



写真： 千旦林の湿地の一つ。ハナノキ（赤）とシデコブシ（薄ピンク）が開花している。

では、道路、住宅、ゴルフ場等の大型開発によって、その数が著しく減少しています。千旦林は、このような湿地を今でも普通にみることのできる貴重な場所であるといえます。

湿地は、太古の昔より、伊勢湾周辺の独特の地史を背景として、生成と消失を繰り返してきました。ハナノキやシデコブシなどの植物は、長い歴史の中、湿地をよりどころとして進化をとげてきた地域固有の植物です。そして、環境省や岐阜県のレッドリストにおいては絶滅が危惧される種に指定されており、その保全が強くもとめられている植物でもあります。さらに、湧水湿地という自然環境そのものが貴重かつ減少傾向にあることから、絶滅が危惧される「生態系」として、それらを丸ごと保全する必要性などが議論されています。

ハナノキについては、国内最大規模の個体数を有する自生地が千旦林にあることがわかっています。このことは、かつて新聞記事などでもとりあげられました。わたしは学生時代に、ハナノキの生育する湿地を数十か所調査しました。千旦林のハナノキの個体数は、ほかの地域のそれよりも群を抜いて大きく、本種が絶滅危惧種であることを考えれば、ここは最優先に保全が検討されるべき自生地の一つです。

千旦林地区の湿地群のもう一つの特徴は、それが地元の人々にとって、ごく身近な自然として存在し、集落の営みと共存して残されてきたことにあります。たとえば湿地の近くには、湿地から流れる水を用いて耕作を行い、清水を住居の庭にひき入れ、利用されているお宅などがあります。わたしは調査の際、地域の方々ともお話をさせていただく機会がありましたが、ハナノキやシデコブシなどの希少植物に自然体で接し、ごく身近なものとして愛でる気持ちをもたれているとの印象を受けました。

2013年11月27日に、この千旦林地区に、リニア岐阜県駅につなげることを想定した高

規格道路の建設計画が発表されました(参考資料)。500m幅で示されたルート候補地帯には、ハナノキの最大規模の自生地を含め、上記に述べた湿地が多数含まれています。同日実施された住民向けの説明会においては、質疑応答の際、地域住民の方より自然環境、農業、遺跡文化財等への影響を懸念する意見が出されました。さらに、第一回目の説明会においていきなり500m幅の狭い範囲でルート帯が示されたこと、また3か月後の2014年2月には具体のルート案が作成されるという性急な計画であることについて、疑問の声が寄せられていました。

千旦林のように湿地が多数分布する地域において道路建設が行われれば、当該地域の水環境が変化し、湿地の水量・水質などが変化して、湿地群に大きな影響を与えることが危惧されます。そして、湿地のある場所に道路が建設されれば、湿地とそこに生息する動植物は全て消失してしまいます。

道路整備のような公共投資は、基本的に、そこに住む人々が必要性や計画性を吟味し決定していくべき事項です。ですので私は、この道路の建設計画自体を全て否定すべきとの意見はもっていません。しかし、千旦林が類まれな自然環境をもつことにかんがみ、(1)道路の必要性に関する議論の熟成、(2)自然環境への影響の精査、(3)地域住民の方々との対話を重視した丁寧な意志決定プロセスの構築、の3点が重要であるとの意見を述べたいと思います。

(1)については、リニア中央新幹線の建設について問題点が指摘されており(たとえば自然保護協会 HP <http://www.nacsi.or.jp/katsudo/kokuritsu/2013/11/post-22.html>)、その実現性について、いまだ不透明な部分があることによります。そのような状況のもと、駅ができることを想定して道路建設を始めることがよいことなのかどうか、建設主体と地域の方々に、今一度、議論をつくしていただくことが重要と考えます。(2)については、貴重な植物が生育する湧水湿地がルート候補帯の中や周辺に数多く分布していることから提起します。さきの住民説明会では、提示されたルート帯よりも中津川市街地にもっと近接したルートを検討できないかといった意見も出されていました。すなわち、計画の初期段階から、貴重な湿地や天然記念物などが集中する狭いエリアに候補ルートを限定してしまっているため、自然環境や地域の方々の住環境の保全に配慮した計画をたてづらく、かつ中津川市街地の活性化といった別の側面に対する選択肢もせばめざるをえない状況になっています。また説明会においては、建設主体である県の担当者より、環境アセスメントを行わない可能性があるとの説明がありました。しかし、千旦林には、貴重な自然環境が存在し、それらが地元の方々の生活と密接に結びついている場所であるため、環境アセスメントは不可欠であると考えます。(3)については、1か月の意見収集期間があるものの、第1回目の説明会から3か月という短い期間でルート選定に入るといって、性急なスケジュールが組まれていることを懸念しての意見です。道路の整備には莫大な費用が生じ、建設対象となる地域社会には、用地収用や景観の改変といった大きな負担がかかります。自然環境の保全はもちろんのこと、農業用水・生活用水への影響、騒音をはじめとする生活環境や

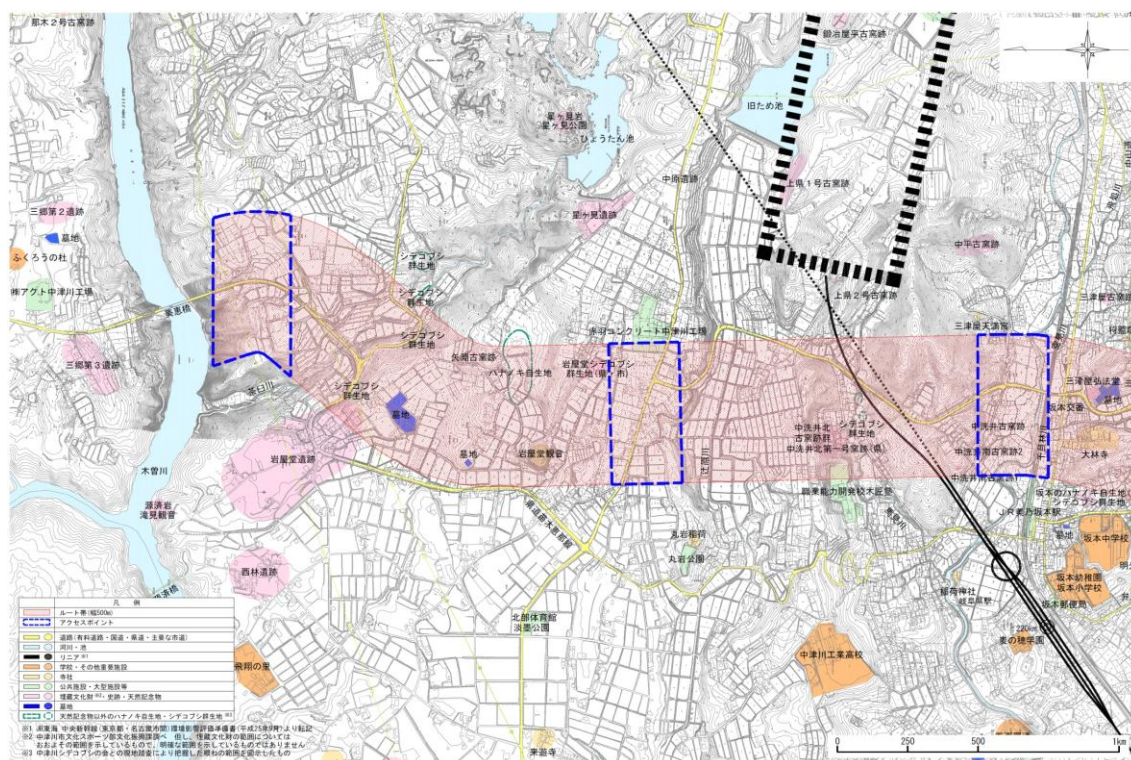
次世代をになう子供たちの教育環境の影響等、あらゆる観点から丁寧な検証を行い、地域の人々が納得できるかたちで、最善の意思決定がなされるよう、計画を再検討されることを要望します。

(2013年12月 岐阜県濃飛横断自動車道建設計画のパブリックコメントに対する意見として提出。)

参考資料

2013年11月27日の説明会で発表された道路計画地図（県HP <https://www.pref.gifu.lg.jp/soshiki/kendo-seibi/doboku-jimusho/ena/index.data/131127setsumeikaishiryo.pdf> の資料より抜粋）。

薄ピンクで示されたルート候補エリア内には、絶滅危惧種の生育する湿地が点在しており、美しい里山景観が広がっています。「ハナノキ自生地」と書いてある湿地は、ハナノキの個体数ベースで日本最大の規模を誇ります。また、地図右中ほどにある坂本のハナノキ自生地は、日本ではじめてハナノキの自生地が確認された国指定の天然記念物です。



参考文献

中日新聞記事。「絶滅危惧種私有地に1000本。ハナノキ中津川に最大群生地」2008年4月6日。

はなのき友の会。2003。ハナノキの保全。はなのき友の会，飯田市。

糸魚川淳二。2011。シデコブシ・ハナノキ・ヒトツバタゴの自生地-1 一地形・地質・水環境との関連を中心の一。瑞浪市化石博物館研究報告 37:149-180。

糸魚川淳二。2013。シデコブシ・ハナノキ・ヒトツバタゴの自生地-2 自然環境と自生地の現況 瑞浪市化石博物館研究報告 39:91-121。

- 北沢あさ子 (2009) ハナノキ湿地の絶滅危惧植物. 長野県植物研究会誌 42:63-64
- 日本シデコブシを守る会. 1996. シデコブシの自生地. 日本シデコブシを守る会. 瑞浪市.
- Saeki, I. 2005a. Application of aerial survey for detecting a rare maple species and endangered wetland ecosystems. *Forest Ecology and Management* 216:283-294.
- Saeki, I. 2005b. Ecological occurrence of the endangered Japanese red maple, *Acer pycnanthum*: base line for ecosystem conservation. *Landscape and Ecological Engineering* 1:135-147.
- Saeki, I. 2007. Effects of tree cutting and mowing on plant species composition and diversity of the wetland ecosystems dominated by the endangered maple, *Acer pycnanthum*. *Forest Ecology and Management* 242:733-746.
- 佐伯いく代. 2006. ハナノキの自然史：レビュー. 伊那谷自然史論集 7: 83-92.
- 植田邦彦. 1994. 東海丘陵要素の起源と進化. Pages 3-18. 岡田博, 植田邦彦, 角野康郎. 植物の自然史. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
- 植田邦彦. 1989. 東海丘陵要素の植物地理. I. 定義. *Acta Phytotaxonomica Geobotanica* 40:190-202.